

天和二年銘手水鉢



〔指定年月日〕平成二四年二月二三日
〔種別〕有形文化財（彫刻）
〔名称〕天和二年銘手水鉢
〔点数〕一基
〔所有者等〕光明院
〔所在地等〕上荻二―一―三

天和二年銘手水鉢

この手水鉢は、安山岩でつくられ、全体としてどっしりとした重厚感を与えるものである。また、底部は直線状であり、江戸時代前期の様式である。正面には開花した大ぶりの蓮華と、その左右に未開の葉を厚く浮彫りしてあり、左、右面はともに半ば開いた蓮華と葉を同じく厚く浮彫りしてある。いづれも雄渾な図柄で、江戸時代前期の石造品の特色を示している。一般に江戸では元禄年間（一六八八〜一七〇三）以前の石造遺物は少ないといわれており、江戸郊外においてはさらに稀少となる。

天和二年（一六八二）は、手水鉢として区内最古の記念銘である。銘文には「荻窪村」（荻窪村）の村名、造立の趣旨として「元心」という人物の菩提の為であること、願主、石工、大工、当時住職の一名の名が刻まれている。大工名があることは、この手水鉢の造立と同時に水盤舎も建立されたことを示している。石工は江戸市中木挽町の者で、この手水鉢の出来具合からみても、当時一流の優品と考えられる。これらのことから、この手水鉢の造立にはかなりの費用がかかったと推測され、これを喜捨した富裕な人達は荻窪村の中心的百姓であったとみられる。

また、銘文にみえる「當寺朝善」は、光明院歴住墓地に朝善の墓石（元禄三年正月六日没）があることから、光明院住職と考えられ、天保十一年（一八四〇）の火災によって記録

類を焼失したため不明な部分が多い、江戸時代前期の光明院の寺史にとつても重要な資料といえる。
この手水鉢は、手水鉢として区内最古のものであり、江戸時代前期の石造品の特色を示すものとして貴重である。また、同時期における上荻窪村の文化・社会組織などを物語る資料として重要である。

【文化財所在地】

